

〔書 評〕

大迫輝通著

## 『日本の製糸都市

——都市再生の地理学的研究——』

戸 所 隆

### 1 蚕糸業の歴史的展開と地域的展開の 体系化をめざす

養蚕農家に生育した著者は、1953年に丹後機業についての卒業論文をまとめて以来、桑園や蚕糸業に関する調査研究を一貫して行なってきた。それらの研究には、実体験からくる桑園や養蚕業、製糸業への愛着がまず感じられる。また同時に日本の資本主義発展の原動力となった蚕糸業に関する地理学的研究の少なさを自ら体系的に構築しようとする著者の意気込みが感じられる。研究の大半は、実地調査によって得られたデータをもとに分析された精緻な実証研究で、それらの成果は地理学学会誌や大学紀要に随時掲載されてきた。

著者は、蚕糸業の歴史的展開と地域的展開を地理学的な視点からかかる数多くの研究を体系的にまとめるべく、これまでに3冊の学術研究書を上梓している。本書は第4冊目の著書で、本書も蚕糸業研究の体系化をはかろうとする著者の一連の研究の一つに位置づけられる。したがって、これまでの著者の研究について概略ふりかえてみるのが、本書を理解する上に役立つであろう。

最初の著書は『桑と繭——商業的土地利用の経済地理学的研究——』（古今書院、1975、382ページ）である。この本は、著者の学位論文であり、その中心課題は桑園・養蚕地域の地域構造分析であった。いわば、繭産業そのものの研究であり、蚕糸業の体系的な研究において第1段階を構成するものである。

次に出版された『繭地盤——繭取引と流通の構造——』（古今書院、1979、225 ページ）は、前著が蚕糸業の農業的側面を中心に描いたのに対し、繭取引という蚕糸業の流通的側面に焦点をおいた著作である。「繭地盤とは、特定の製糸企業（営業製糸・組合製糸・国用製糸など）や繭糸業者などと結びつき、長期的・固定的に産繭を一括これへ販売している養蚕地域または養蚕農家」である。繭地盤取引は、明治末期の発生以来、名称は変わったものの、一貫して繭取引の中心形態をなし、地域的にも特色ある様相を持つ。蚕糸業という農業（繭生産）と商業（繭と生糸の流通）と工業（製糸）が統合された特異な産業を扱う場合、原料地盤の研究は避けて通れない研究分野である。著者のこの第2著書も、栗原藤七郎東京農業大学名誉教授が書評（岐阜経済大学論集、第13巻3号、1979年）しているごとく、学界に大きな業績として存在する。

次いで1983年には『蚕糸業地域の比較研究——温帯日本と熱帯——』（古今書院、352ページ）を出版された。この書を著者は三つの目的を持ってまとめている。その第1は、戦後の蚕糸業の推移に重点をおいた分析・研究を旨としたことである。それは、著者の既刊本の研究の中心が第2次大戦前であったことによる。また第2の目的は、製糸業について研究していることである。これまでの著者の研究中心が、蚕糸業という農業的側面と工業的側面の両面を持つ産業であるにもかかわらず、養蚕と繭の流通という農業的側面にかたよっていた。製糸業は、工業であるにもかかわらず、農林水産省の行政領域にあることからしても、また、著者の研究の流れからみても、製糸業に焦点をあてた研究は、自然な研究発展の方向であったといえよう。

第3の研究目的は、国際的な視点から蚕糸業を比較研究することで、前二者とはやや趣を異にする。しかし、かつて、世界の蚕糸業国であった日本は、その地位を今日では中国やインドなどに譲っている。このため、蚕糸業の実態と発展過程をグローバルな視点からみることの重要性は、この種の研究に欠くことのできないものである。著者は、日本を圧倒する発展途上国の蚕糸業の実態を台湾とインドの現地調査から明らかにし、温帯日本と熱帯の蚕糸業と蚕糸業地域の比較研究を行なう中で、両地域の特異性と地域性の解明に努めた。

ところで、第2次大戦後における蚕糸業の推移を分析し、製糸業に研究の重点を置けば、蚕糸業の衰退化と製糸業の地域的展開に研究の方向は自然にシフトせざるを得ないであろう。第3著書『蚕糸業地域の比較研究』の第1部第3章で、長野県

岡谷市と須坂市を例に、「製糸都市の再生」を著者はかかる視点から論じている。今回出版された『日本の製糸都市——都市再生の地理学的研究——』は、前著におけるそうした研究方向の集大成として位置づけられよう。また、「蚕糸業の歴史的展開と地域的展開を、体系的に、かつ地理学的に究明することをめざしてきた」著者にとって、一つの大きな節目をなす出版でもあると理解される。

1975年の『桑と繭』から本書の刊行までの12年足らずの間に、蚕糸業の歴史的展開と地域的展開の体系化をはかるべく、着実に現地調査を繰り返しつつ、その研究内容を大部4冊にまとめ得た著者の努力と、その業績にまず敬意を表したい。

## 2 全国的スケールでの製糸都市の動向と代表的製糸都市の事例研究からなる2部構成

まず本書の構成をみてみよう。全体としては表記の2部構成であるが、その章構成は以下の通りである。

### はしがき

#### 序章 日本蚕糸業の発展と衰退

#### 第I部 製糸都市の推移と現況

##### 第1章 製糸都市の形成と発展

##### 第2章 製糸都市の構造

##### 第3章 製糸業の衰退と製糸都市

##### 第4章 製糸都市の再生——製糸都市のその後——

#### 第II部 製糸都市再生の比較研究

##### 第1章 前橋の再生

##### 第2章 古河市と丸子町

##### 第3章 甲府市の再生

##### 第4章 豊橋再生の研究

### むすび

序章は全国的スケールでの蚕糸業の推移と地域的展開に関する考察である。まず著者は、1930年までの発展期をさらに勃興期、漸増期、急伸期の3期に分け、1931年以降の衰退期を第1停滞期、急減期、回復期、第2停滞期、減退期の5期に再区

分した。そして各時期における経済状況の変化と絹需要・生産関係の推移について詳述している。日本における蚕糸業の動向に関するこの整理は本書を読みすすめる上で有用なものとなっている。ただ、欲をいえば、1974年以降の減退期(p.8)における国内需要減と輸入の関係や石油危機との有機的関連性についての説明が欲しかったといえよう。

次に著者は、蚕糸業が地域的に集中、拡散、集中を繰り返しつつ養蚕業と製糸業とが地域的に分離する蚕糸業の地域的展開過程を概説している。養蚕業の地域的集中傾向に対し、製糸業は地域的に拡散傾向を持つとの指摘は、蚕糸業の性格を地理学的に的確に指摘したものと評価できる。今後、かかる地域的展開に関する精緻な要因分析が必要であるが、序章として問題提起としてみれば、その価値は高い。

第I部は、製糸都市の発生とその発展過程を各種の統計を用いて全国的な視野から分析したものである。スペース全体に占める割合は40%である。詳細は後述するとして、明治以降における製糸業の動向を簡潔に整理し、地域的な特色を析出している。その成果は著者の努力のたまものであろう。

第II部では、特定の製糸都市をとりあげて、製糸業の盛衰と都市の発達との関係について論じている。ここで、岡谷がとりあげられていないのは、その重要性からいって不自然であろう。しかし、前著『蚕糸業地域の比較研究』で岡谷・須坂が既述されていることと、本書でも必要に応じて両都市の実態が記述されていることから、著作全体の体系化には何ら問題が感じられない。

ところで、第1著書～第3著書は、農業地理学を中心とした経済地理学的研究であったといえよう。しかし、本書は経済地理学であることに変わりはないものの、都市地理学的側面が強くなっている。それは、基幹産業の衰退が都市に与えた影響のりこえて、都市が再生した実態をみていることによる。今日、産業構造の変革やそれに伴う都市構造の変化に都市がいかに対応して再生をはかるかの都市再生論が、都市地理学をはじめ都市関係の学問分野で論議されている。本書は、日本で最初に近代工業化が進んだ製糸都市の変化とその再生を実証的に研究したものであるだけに、かかる都市地理学の今日的テーマとも大きくオーバーラップしてくる。農業地理学者の著わした本書を、都市地理学を専門とする筆者が書評することも、本書が都市地理学的にも価値ある著作であるからに他ならない。

著者と評者の専門が異なることからくる研究視点の相違は、当然存在しよう。そ



のために、都市地理学的視点に偏った書評になることを恐れるが、その点は都市地理学を専門とする者の希望事項とご容赦願いたい。

### 3 日本近代化の機関車の役割を担った製糸都市

まだ京浜・阪神工業地帯などが形成される以前の明治初期において、富国強兵、殖産興業のための外貨かせぎの旗頭になった工業製品が生糸であった。この生糸は、資源の乏しい日本にあって原料・技術とも国内自給のできた貴重な輸出品である。当時海外から導入した商船、軍艦、鉄道をはじめとする近代的技術や施設の多くが、生糸の輸出で得た外貨によってかなりの程度まかなわれた。そのため、生糸を生産する製糸工場の集積する製糸都市は、日本の近代化および近代都市形成に多大な貢献をなしたといえよう。

著者は、かかる製糸都市の発達を、まず器械製糸の普及に視点をおいて論じた。すなわち、生糸生産の量的拡大と品質の均一化の必要性から、器械製糸は1877年を画期として増加し、19世紀末には伝統的な座繰製糸を凌駕するまでになった。その結果、器械製糸が導入されるまでの農家が繭と生糸を一体的に生産する体系から、農家の養蚕（繭づくり）と専業製糸家による生糸づくりとの生産分業化が進展した。また、都市での資本蓄積が進む中で、専業製糸家が都市へ集積し、製糸都市が形成された。

かかる製糸都市の形成・発達には、生糸の輸出港である横浜や、政治・経済の中心東京と蚕糸業地域を結ぶ鉄道の発達が大きな役割を持った。当時、シルクロードと化した鉄道は多く、著者は全国的スケールで製糸都市の発展と鉄道敷設の状況について、製糸工場数・設備釜数・製造量および原料繭や生糸移動量の視点からも論じている。以上の点を論じた第Ⅰ部第1章はその後の論理展開の基礎的役割を持つ。また、鉄道のような交通動脈や都市基盤整備が産業の発達と相まって、都市形成に大きく関係しているようすは、今日の都市問題や都市形成を考える上で大いに役立つ。

### 4 3タイプに類型化される製糸都市

第Ⅱ部第2章は最盛期の製糸都市の構造を全国スケールで分析したものである。

製糸都市の再生を考察するに際し、かかる製糸都市の最盛期の構造を知ることは重要である。著者は第II部第2章でそれらについて、設備、生糸生産と生産量、製糸労働力と労働条件、人口構成を分析指標に、全国スケールで論じている。なかでも、製糸工場の規模と集積状態から全国48製糸都市を3タイプに分類整理していることが本章の特徴である。

第1のタイプは、「多数工場の集積する製糸都市」である。このタイプは、前橋市、甲府市、下諏訪町、岡谷市、豊橋市など、製糸都市の典型として第II部で論じられる都市に多い。第2のタイプは、「少数有力工場が並立する製糸都市」である。このタイプに分類される製糸都市は、第1タイプに比べ、主に大正期に創業した有力工場からなる後発製糸都市が多い。現在の大宮市や沼津市、大分市などがその例である。また第3タイプは、「単一の大工場が立地する製糸のまち」である。これに分類される都市は、現在の小山市、深谷市、豊岡市など、第2タイプ同様、後発製糸都市に多い。

かかる分類は、製糸都市の構造や性格を理解するのに大いに参考になる。著者は、製糸都市の労働力分析においても、この分類視点から相互比較している。ただし、他の分析指標においては、必ずしも、この3タイプとの関連で論じられていない。もし、3タイプを柱に諸指標の分析結果を再整理されたなら、より一層、全国スケールでの最盛期における製糸都市の構造が浮びあがってくるのではないとも考えられる。

また、第2タイプ（少数有力工場が並立する製糸都市）に、後発製糸都市が多い理由として、「先進地域へは大工場が入る余地がないことや新興の養蚕地域（とくに近畿以西の西日本）への工場進出が多いことによる」などの要因分析がなされている。これについても、3タイプに分れるかかる要因分析と地域性との関連について、先述の各分析指標ともっと関連させつつ、もう少しつっこんだ分析がなされると、日本における製糸都市の地域的構造がさらに明確になったのではないだろうか。

## 5 恐慌と戦争によって変化した製糸都市——再生への道程を描く

世界経済恐慌以降、蚕糸業の衰退化が進む中で、政府の蚕糸業統制施策が相次い

で出された。他方で、製糸業界の大資本家による寡占化が進行した。しかし、それも、1941年の蚕糸業統制法によって、蚕糸業界は統合され、戦時体制へと移行した。第3章では、かかる恐慌以降の停滞と第2次世界大戦による戦争経済・戦災によって衰退する製糸業・製糸都市の存在形態が論じられている。

この時期、全国的な製糸業の衰退と再編が進む中で、「収繭量と製糸設備の地域的不均衡」(77ページ)がみられるようになったとの指摘は、その後の製糸都市の再生や日本の製糸業の地域構造を知る上で貴重な指摘といえよう。なお、欲をいえば、かかる地域的不均衡と、片倉、郡是という大資本の積極的な設備拡大とがいかに関係しているかの都市レベルでの分析が望まれる。

軍需産業への転換を目的とした戦時中の大規模な2度にわたる企業整理は、製糸都市を変容させた。また、そのために代表的な製糸都市の多くがB29爆撃機による爆撃対象となり、壊滅的被害を受けた。かかる第2次世界大戦と主要製糸都市との関係についての分析は、第4章の戦後における全国の製糸都市の再生状況や第II部の個別製糸都市の再生状況を理解する上で重要な論理展開をなしている。

第4章は、戦災によって壊滅状態になった製糸都市の変容と再生を、41市町(旧48都市の現行政区画による)について機能面と土地利用面から論じている。まず、戦後の製糸業の推移と製糸業に代わる諸工業振興状況を全国的スケールで概観している。すなわち、戦後の経済復興で製糸業界も回復したものの、その衰退状況は変わらず、製糸業は輸出産業から輸入産業へと構造変化した。こうした製糸業の構造変化は、製糸業を産業基盤としてきた製糸都市をも変容させた。著者は、かかる製糸都市の現況を、まず主要製糸都市の工業製品製造出荷額や商業販売額から分析した。その結果、「かつての製糸都市は、現在、電気・一般・輸送などの機械器具のほか、食糧品製造・化学工業などの諸工業都市へと転換・再生している」(99ページ)ことを明らかにしている。

次に著者は、年齢別・男女別・産業別人口構成を指標に製糸都市の都市機能分析を進め、今日の都市的性格を、A 工業都市、B 商工業都市、C 商業サービス都市、D 田園(農業)都市、E 田園工業都市、F 総合都市に6分類し、Bの商工業都市が最も多いとした。

さらに著者は、製糸工業跡地の現状と桑園の残存率などをみるべく製糸都市の農地の利用状況を検討している。その結果、製糸工場跡地は製糸業以外の工業用地に転換し、建物も建てかわっているものが全体の1/3を占め最も多く、住宅地や駐車

場への転換も全体の1/3ほどを占め、他はさまざまな用途に変化している実態が示された。これらの分析結果は、第II部の古河、前橋、甲府、丸子、豊橋における各製糸都市の事例研究を理解する上で有用な基準を提供している。なお、都市地理学的視点からみると、製糸都市の分析に都市的土地利用のみならずそれとの関連で、水田率や桑園率の変化など農業的土地利用を分析している点は新鮮である。これは著者の桑園等を中心とした土地利用研究の都市機能分析への応用であり、著者のバックグラウンドが大きく貢献しているものと思われる。

## 6 多彩な製糸都市の盛衰と再生を描く第II部

第II部は4章からなり、前橋、古河、丸子、甲府、豊橋の代表的な五つの製糸都市の変遷と再生の実態を分析している。内容的には現地調査をもとに綿密で内容豊かな、製糸業を中心にみた、都市誌である。また、日本の代表的な製糸都市の近代以降における都市形成とその機能的都市的性格の変遷も知られ、経済地理学のみならず都市地理学的にも興味深い内容である。

たとえば、日本最初の器械製糸導入都市である第1章の「前橋の再生」においては、次のような構成で調査結果の分析を行なっている。第1節の製糸業の変遷は3期に分けて論じられる。まず、前橋の製糸業は、横浜開港を契機に大正期まで飛躍的に発展し、後年、日本最大の製糸業地へと発展する諏訪地区に先がけて日本一の製糸都市となる。この大正期までの発展期を第1期としている。第2期は、第2次世界大戦以前の昭和前期における前橋製糸業の最盛期で、著者は、起業年や経営形態などの組織面や工場規模、原料繭と生糸生産高との関連、工場分布状態から前橋製糸業の構造分析を行なった。第3期は、第2次世界大戦後の再興と衰退、都市再生の時期で、製糸工場の軍需工場化と戦災、製糸業の戦後の復興状況の実態とその分析がみられる。

全国的に製糸業の衰退が著しい中で、前橋は近年まで比較的高い水準で製糸業を維持してきた。その理由を著者は、岡谷と比較しつつ次の事項を要因としてあげている。すなわち、① 桐生の絹織物業など県内における関連産業との結びつきの強さ、② 原料繭産地に近接していること、③ 地元における繭糸業者との結びつきの強さ、④ 市街地の戦災と疎開企業の少なさ、である。

第2節「前橋の繭糸業者（繭仲買業者）」では、繭取引方法の推移をみる中で、



繭仲買業者の存在の大きさとその活躍による前橋製糸業の特異性を論じ、それらの現状分析もあわせて記述している。なお、前橋の製糸業に大きな特色をもたらしたこれらの業者が、今日では高齢化し、後継者もいないことに、前橋製糸業の将来が予測できる。

第3節「都市機能の現況」では、まず、統計分析によって都市機能の推移をみている。その結果、一般的な商業の発達や地場の食品・家具工業に加えて、昭和30年代以降の電気機械・輸送機械工業が立地し、工業発達も総合化し、製糸都市から総合機能都市として発達する前橋の今日の姿を浮きたたせた。そして、製糸業の前橋経済に占める地位の低さから、もはや製糸業の町とはいいがたい実態を描いている。

第4節の「製糸業と土地利用」では、製糸工場跡地が住宅地へと転換したものが最も多く、次いで学校などの公共用地や娯楽施設・スーパー・駐車場に土地利用転換している実態を分析している。また、第I部第4章同様にかかる土地利用転換と桑園の減少との関係を見るべく、農業的土地利用の変化への言及がみられる。

以上の製糸業の盛衰、現在の都市産業構造の実態、工場跡地の土地利用の変化と農業的土地利用関係などから製糸都市の再生を論じる分析手法は、他の4都市にも共通し、第I部第4章のまとめ方にも通じるものである。評者は、ここでとりあげられた都市を年に何回か訪問したり通過したりするが、本書によってこれらの都市景観に残存する製糸都市の面影に妙に親しみと興味がそそられるようになった。同時に、これらの都市の過去と現状、そしてこれからの都市発展の方向性へと思いをめぐらすことが行ないやすくなった。本書のすぐれた分析・記述のなすわざであるといえよう。

## 7 本書の成果と課題

著者は第I部において府県や全国48製糸都市の統計的比較を駆使して、製糸都市の生成とその発展・停滞から衰退・再生への流れを、時代の変化という縦糸と地域性という横糸をおりなしつつみごとにまとめあげている。多くのデータをもとに、これだけの内容を約100ページの中に盛りこみつつも、それらを整然とした論理展開によって、近代日本の産業発達と都市形成との関係を論じ得たことは、大きな成果といえよう。また現地調査をもとに、代表的な製糸都市の盛衰と再生の実態

を論じた第II部は、大学学長という激職にあってもなお、地理学者としての基本を着実に実践された結果としての成果である。これらの成果に敬意を表したい。また、本書にみる研究の幅広さは、蚕糸業に関する研究を体系的に発展させつつ、3冊の既刊著書をものにされた著者の努力の賜物であろう。

ところで、前橋を郷里とする評者にとっても著者同様に、桑つみ・桑の実・蚕棚・繭玉・製糸工場・サナギのにおいは幼き頃の原景観である。また、前橋を研究地域の一つとして都市地理学を研究してきた者として、いくつか気がついたことをのべてみる。

まず感じることは、「製糸都市」の定義についてである。製糸都市を選定する統一的な基準が必ずしも明確でない。おそらく、この基準を明確にする過程で、製糸業と他の要素との関連性がより一層明らかになり、製糸都市の分類も普遍性をより一層強めることができたのではなかろうか。

次に、製糸都市の形成・集積の地域的差異が生じる要因分析についてである。本書によれば製糸都市や地域ごとに器械製糸と座繰製糸の比率や営業製糸と組合製糸の割合が大きく異なっている。それらが製糸都市の形成や集積に、また都市の性格にいかなる影響を与えているのか。その後の再生にどう結びつくのか。たとえば営業製糸が盛んな都市と組合製糸が盛んな都市では、原料繭と製糸工場との結合関係がかなり異質で製糸業者気質も大きく異なり、結果として、その都市の性格にも都市再生にも差異が生じると考えるがいかなものだろうか。これらに関する全国レベルでの分析が第I部でおこなわれていれば、第II部における各製糸都市の特色をより鮮明に描けたのではないかと評者は考える。

製糸工場の跡地利用について、著者は詳細にその実態を追求し、その成果は既述の通りである。ただ欲をいえば、これらの製糸工場の分布地域は、現代都市の地域構造からすると、概ね都心周辺地域に位置する。都心周辺地域は、日本の都市が近代化・都市化する中で、都心と郊外の発展にはさまれた停滞地域として構造化してきている。そのため、今日、これらの地域は、都市政策上からも再開発などによって再活性化がはかられている。その際、都市構造的に、社会経済構造的に、これらの地域は集合住宅、駐車場、大型店を中心とした大規模商業施設が立地しやすい。したがって、かかる都市構造的な視点をも加味して製糸工場跡地利用の変化について分析したならば、より一層製糸都市の再生論議が構造的・動的になったと考える。

ところで、第II部の記述スタイルが、製糸業の盛衰、産業構造の変化と実態、製糸工場跡地利用と農業的土地利用の変化にほぼ統一されている。このスタイルで統一することは相互に比較しやすい側面を持つ。しかし他方で、あまりに画一的で、それぞれの都市の特徴を十分に出しきれていないように思う。その意味で、各都市の最も特徴的な事項を柱に記述スタイルを構成しなおすと、読者には著者の意図が理解しやすくなり、より明確に伝わるのではないかと思う。

都市地理学的にこの種の研究をする場合、製糸都市の立地条件・伝統的財産が今日いかに生きつづけ、都市再生にどのように貢献してきているかの視点が重要となる。またそのことが、都市構造や都市機能の発達方向にどのような影響を与え、規制しているかを追求するであろう。そして、当該都市の人文・自然条件の差が、いかに都市の性格差となってあらわれてくるかをみようとする。ただし、以上の見方は、都市地理学的視点であり、本書のテーマにそのままあてはまるか不明である。一つの参考にしていただければ幸いである。

なお、ささいなことであるが、本書を専門外の人や古い地名を知らない人にも読みやすくするために、旧町村名には現市町村名を逐一付記することも必要ではないかと思う。

以上、本書の概要と若干の感想をのべたが、本書は、いわば日本の近代化に大きな役割を果たした製糸業を中心に、製糸都市について農業地理学・都市地理学そして経済地理学的に集大成したもので、日本の近代化と現代都市を研究する者にとって必読の書物といえよう。

（古今書院，昭和62年6月，A5判，280ページ，定価3800円）